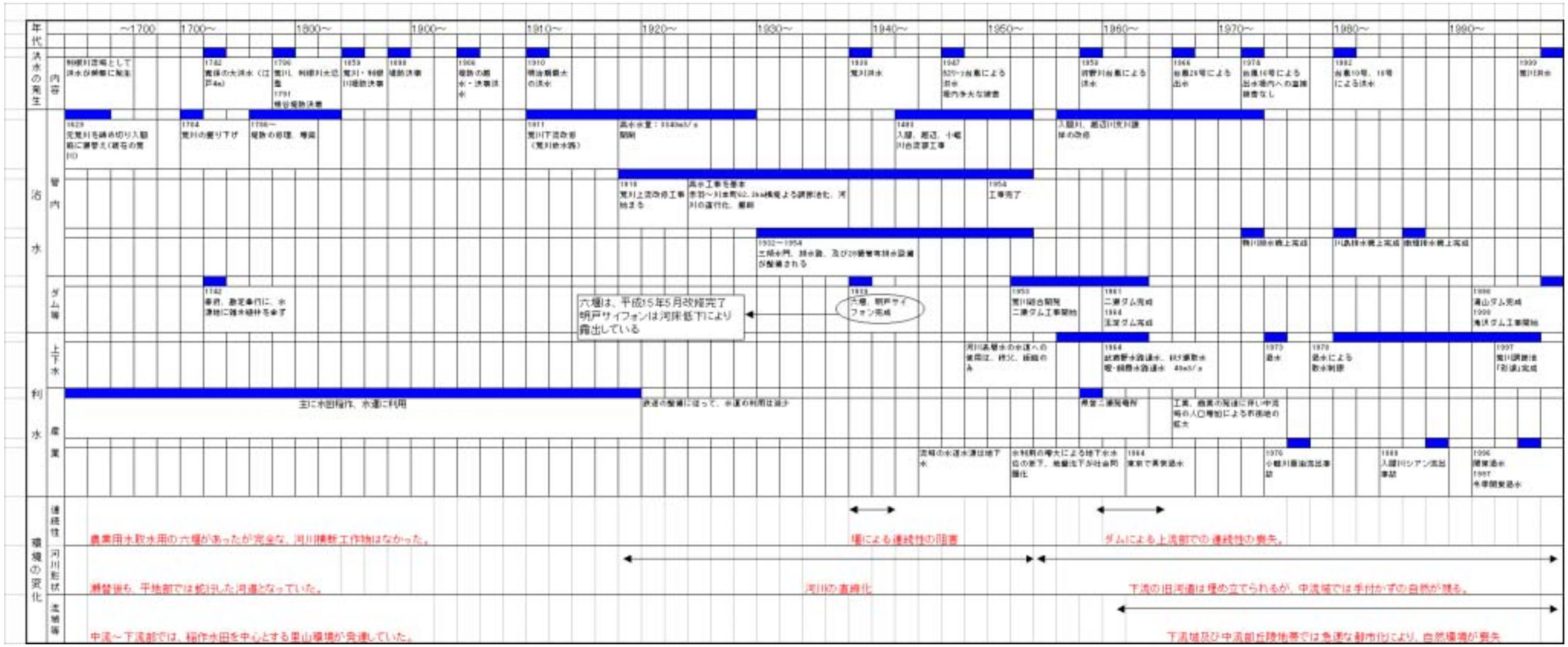
Ⅰ-1　荒川の歴史的変遷

1) 明治 43 年（1910 年）まで

- 荒川の川筋は、江戸時代以前には古利根川の一支川として、現在の東京湾に注いでいた。その名の由来である「荒ぶる川」が示すとおり、主に扇状地の扇端にある熊谷より下流ではしばしば流路を変えていた。
- 江戸時代の慶長年間（1629 年から）に関東の郡代・伊奈忠治によって、利根川筋の遷移と同時期に現在の熊谷市付近から入間川筋に川筋を変える工事、いわゆる「利根川の東遷・荒川の西遷」が行われ、これによりほぼ現在の川筋となった。
- 瀬替後も中流域では氾濫・洪水を繰り返し、河道は自然蛇行した河川であった。
- 流域の低地では水田開発が盛んに行われ、また江戸への物資輸送の水運路として利用されていた。

2) 明治 44 年（1911 年）から昭和 29 年（1954 年）まで

- 明治 43 年に起きた洪水は流域に甚大な被害を与えた。これを契機に東京首都圏の洪水防御を目的とし荒川第一次改修計画が着手され、下流部で荒川放水路の開削工事が明治 44 年（1911 年）に始まった。
- 中流部でも、赤羽付近から埼玉県吉見町までの約 30km 区間について、大正 7 年（1918 年）より昭和 29 年（1954 年）まで 36 年の歳月をかけ河川改修が行われた。この改修では、堤防を補強するとともに、水路の開削、流路の直線化等が行われた。このとき、荒川の特徴である横堤が造成された。

3) 昭和 30 年（1955 年）以降

- 昭和 30 年代以降、日本経済は高度成長期を迎え、その成長とともに、荒川流域に人口・産業が集中するに至り、新たな治水対策が必要となってきた。
- 人口の増加、産業の発展に伴い水の利用量が増大し、それまで中流及び下流域では地下水の使用が主であったが、地盤沈下の問題により、河川の表層水使用の割合が増加してきた。昭和 36 年には、武蔵水路及び秋ヶ瀬取水堰が竣工した。
- 中流及び下流域の自然環境は、周辺の市街の進展に伴い、分断、喪失していった。
- 上流域では、治水及び利水のために多目的ダムの二瀬ダム及び玉淀ダムが建設された。
- 取水制限を行うほどの渇水が昭和 39 年より頻発し、現在に至っている。
- 旧河道は、下流部では埋め立てられ市街化してしまったが、中流域では現在でも改変当時の自然環境を残している。